アジア・アフリカ地域研究 第 20-1 号　2020 年 9 月
Asian and African Area Studies, 20 (1): 139–173, 2020

書　　評

柳沢英輔.『ベトナムの大地にゴングが響く』灯光舎，2019 年，331 p.

梶丸　岳 *

本書は 1 枚の CD をきっかけにベトナムのゴング音楽に惹かれた著者による，13 年にわたるベトナムゴング文化研究の成果である．東南アジアはゴング文化が発展している地域として知られ，とくに島嶼部については非常にさまざまな研究が行なわれてきた．だが本書が対象とするベトナム中部高原のゴング文化は 2008 年にユネスコ世界無形文化遺産に登録されているものの，不安定な政治的情勢のために近年まで外国人は長期調査を行なうことができず，その実態が十分に明らかにされているとはいえない．そうした地域における長期調査に基づいた成果が出たことは，ベトナム地域研究にとっても民族音楽学にとってもおおいに意義がある．

本書の第 1 章では本研究の動機と意義，調査と調査地の概要，および調査対象民族であるバナ族とジャライ族の概要が述べられる．本書の意義として挙げられているのは上述のような背景に加えて，マルチメディア民族誌の可能性を広げるという点である．事実本書には QR コードがついており，リンク先の YouTube リストで動画・音声を視聴することができるようになっている．

第 2 章にはベトナムのゴング文化の歴史，ゴングの種類や価値，竹筒琴ティンニンとゴングの関係などがまとめられている．現地においてゴングは精霊と交信するための道具として重要であるが，その理由として余韻が長く複雑な倍音をもつというゴングの音響特性があることが推論される．さらに現地の人びとがそれぞれのゴングセットの調律と音色に強いこだわりをもっており，調律師がゴング文化を根底から支えている，ということも示される．

第 3 章では，トゥリノ［2015］のいう「参与型パフォーマンス」としての性質が強い伝統的なゴング演奏と，西洋音楽の様式を取り入れ聴衆に見せることを意識した「上演型パフォーマンス」に近い改良ゴングアンサンブルについて解説される．改良ゴングアンサンブルが生まれた背景として，キリスト教への改宗や西洋的な音楽の流入，ゴング演奏の文化遺産化と観光資源化が挙げられている．そして両スタイルを生み出した価値観が地域の中で共存していることが指摘される．

第 4 章ではまずゴングが演奏される状況についての聞き取り調査のまとめが示される．そのうえで主要な演奏機会である葬式および墓放棄祭の内容とゴング演奏の詳細が述べられ，ゴング演奏が儀礼で中心的役割を果たしており，ジャライ族における死生観や霊魂観と深く結びついていることが指摘される．さらに教会の典礼における伴奏としてのゴング演奏についても付け加えられる．

第 5 章では中部高原で使用されるゴングを製造しているベトナム中部の職人が行なっている，鋳造ゴングの製造技法について詳述

* 京都大学大学院人間・環境学研究科

される．そのうえでインドネシアやミャンマーの鍛造ゴングとの比較を通じて製造上の特徴が明らかにされている．

第 6 章では調律師による調律技法に焦点が当てられる．調律師の来歴や活動と調律技法の詳細，さらに若い音楽家が行なう調律方法が解説される．さらに調律前後の音を音響学的に分析し，音高と周波数スペクトルの変化から，調律師が単に音高を調整しているだけではなく，「遠くまでよく響き，よく聴こえる」音響状態を目指していることを明らかにしている．

第 7 章ではバナ族の一村落にあるゴングセットの周波数スペクトル分析によってゴングの音階を明らかにするとともに，ゴングセット内における平ゴングとこぶ付きゴングの音程上の関係性が分析される．そしてゴングセット全体を最終的に五度とオクターブの関係として整理している．

第 8 章では第 7 章の分析を踏まえ，バナ族の葬礼曲と水牛供儀曲における旋律や和音の役割，太鼓のパターンと楽曲形式が分析される．その結果，ゴング音楽にはゴングによる旋律中心のものと太鼓によるリズム中心のものがあること，音階が 2 種類あること，楽曲形式やリズムパターンの実際，和音の役割に主旋律を誘導するものと響きを豊かにするものがあることなどが明らかにされる．

第 9 章はベトナムにおけるゴング文化保護政策と今後のゴング文化の展望についてまとめられている．2000 年代から推進されてきたゴング文化保護政策はゴングを観光資源化する動きと連動しているが，著者によると中部高原地域の少数民族は単に外圧に翻弄されているのではなく，外圧がローカルな文化の再創造と活性化につながる可能性もあるという．

そして「おわりに」では今後の課題として，ゴング調律理論の解明と，バナ族内や他の少数民族との間における調律の多様性の解明，著者がこれまで撮影してきた動画や音声をアーカイブし現地と共有する方法の検討やゴング演奏の魅力を日本に伝える方法の模索が挙げられて論考は締めくくられる．

上述のように本書には映像資料がついている．記述全体をカバーしているわけではないため必ずしもわかりやすくなっているとは言い切れないが，実際のゴングの音を聴き分析の妥当性について検証することができるのは本書の大きな長所である．また，調律や演奏を音響学的・音楽学的に分析している点も本書の価値を高めている．塚田［2014］が批判するように，近年の民族音楽学では社会・文化的分析が主流で音楽そのものの分析がおざなりになりがちである．だがパフォーマンスを対象とする以上，本書のようにその実際を詳細に分析し，民族誌的文脈と有機的に結びつけることが音楽民族誌には本来求められており，本書はその期待に応えている．

とはいえ，本書の分析には不十分な点が多い．問題点としてまず，音響学的・音楽学的分析の不徹底さが挙げられる．本書は「複数の村落を移動しながら，ゴング文化というある一定の地域に共通してみられる文化現象を広域的に調査して，その多様性と共通性，継承における問題点を明らかにしようと」して

いる（p. 13）．だが第 6 章で分析されるのは平ゴング 1 セット分の調律のみ，7 章と 8 章で分析されているのもバナ族の一村落のみである．確かに「おわりに」で今後の課題として多民族・多村落間の比較が挙げられているが，そもそも当初の目的が最終的に本書の中で果たされていないのは問題である．

また第 6 章における周波数スペクトル比較において著者は第二部分音を基音とし，この音と第四部分音に注目して分析している．だがここで第二部分音を基音とする理由は述べられておらず，第 7 章で間接的にその理由が明らかになっている（pp. 233–234）のは論述の順序として問題がある．また第 6 章の最後は若手音楽家のメディア利用について述べられているが，これは別に章を立ててより詳しく論じる必要があるのではないだろうか．本書がベトナム中部高原ゴング文化の今を論じるうえで重要なトピックをここやコラムに付け足しのようなかたちで分散して配置されているのは惜しい．第 8 章の音楽学的分析については，音楽の基本的構造をあぶりだす分析は素晴らしいが，（評者の聴き間違いかもしれないが）打音があるように聴こえるところが休符になっているなど，やや採譜の精密さに欠けているように感じられる．

第二の問題点は民族誌的記述と考察の不十分さである．著者はそもそも民族誌的調査に重きを置いていないが，それにしても記述や考察が薄い．たとえば本書では伝統的なゴングアンサンブルがコミュナルな性質を有している（p. 74）ことが強調されるが，それを補強する具体的な記述が出てこない．肝心な箇所を推測で埋めているのは本書の考察の妥当性に関わる重大な瑕疵である．また著者はゴング文化を支える文化的文脈についてさまざまな民族誌を引きながら考察しているが，対象や地域の違いについてかなり無頓着であるように見受けられる．民族誌はあくまで個別事例なのであり，自身の事例に妥当するとしても地域や対象の違いに対する留保は必要である．さらに第 9 章の文化保護に関する分析も，結論として提出される，受動的なだけではないマイノリティや音楽家という像は，マイノリティ研究でも民族音楽学でも今や目新しいものではない．だがこれに関する先行研究への目配りが本書には欠けている．

著者は民族誌的調査が行ないづらかった理由としてベトナムにおける政治的制約も挙げているが，ベトナムで厚い民族誌を書いている研究者は当然いる．また状況が類似している中国でも数多くの研究者がさまざまな方法を模索しながら長年フィールドワークを実践してきている［西澤・河合 2017］．第 9 章の考察についても中国における研究（長谷［2007］など）が有用な参照点になり得ただろう．ベトナムでの研究蓄積が薄いならば，類似した状況にある他地域の研究も参照することで，本書の探求がより深まった可能性もあるのではないか．

他にも教会での演奏や改良ゴングアンサンブルに関する記述の収まりが悪いなど，全体として十分練り上げられているとは言い難い本書であるが，まずそもそも研究が薄い東南アジア大陸部のゴング文化についてここまで詳細に分析した研究はほぼない点で，東南ア

ジアゴング文化研究に本書が大きな貢献を成し遂げたことは確かである．本書の端々に垣間見えるように現地の人びとと時間をかけて深い関係を築けている著者であれば，今後もう少し綿密な民族誌的調査を行なってゴングの音と文化の関わりについて厚い記述を行なうことができるはずである．さらに分厚くなったゴング文化研究を期待したい．

引　用　文　献

塚田健一．2014.『アフリカ音楽学の挑戦―伝統と変容の音楽民族誌』世界思想社.

トゥリノ，トマス．2015.『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ―歌い踊ることをめぐる政治』野澤豊一・西島千尋訳，水声社.

長谷千代子．2007.『文化の政治と生活の詩学―中国雲南省徳宏タイ族の日常的実践』風響社.

西澤治彦・河合洋尚編．2017『フィールドワーク―中国という現場，人類学という実践』風響社.

増原綾子・鈴木絢女・片岡　樹・宮脇聡史・古屋博子.『はじめての東南アジア政治』有斐閣，2018 年，303 p.

日下　渉 *

今日，大学で東南アジア政治について教鞭をとる者は幸運だ．次のように，東南アジア政治に関する入門書・概説書が，2010 年以降，本書も含めて 6 冊も出版されているからである．いずれも質が高く，どれを教科書に採用するか吟味する過程を通じて，教員自身も勉強することができる．もっとも，東南アジア政治の教科書がこれだけあっても，屋上屋を重ねるだけで意味がないのではないか，という懐疑的な見方もあるかもしれない．しかし，いずれも他書にはない特徴と魅力を有している．

①『入門 東南アジア現代政治史』中野亜里・遠藤聡・小高泰・増原綾子・玉置充子，福村出版，2010 年（2016 年に改訂版），2,500 円.

②『東南アジア現代政治入門』清水一史・田村慶子・横山豪志編，ミネルヴァ書房，2011 年（2018 年に改訂版），3,000 円.

③『東南アジアの比較政治学』中村正志編，アジア経済研究所，2012 年，1,900 円.

④『東南アジア地域研究入門 3 政治』山本信人編，慶應義塾大学出版会，2017 年，3,600 円.

⑤『はじめての東南アジア政治』増原綾子・鈴木絢女・片岡樹・宮脇聡史・古屋博子，有斐閣，2018 年，2,200 円.

⑥『教養の東南アジア現代史』川中豪・川村晃一編，ミネルヴァ書房，2020 年，3,200 円.

①は地域の政治史，②は各国の政治史，③政治制度の比較，④と⑥はテーマ別で構成されている．本書⑤の特徴は，各国政治史とテーマ別の解説を絶妙なバランスで組み合わせて，一冊にまとめあげたことである．従来，たとえばテーマ別の本を教科書に採用したら，各国政治史の本を副読本に指定するなどの配慮が必要だった．しかし，本書であれ

* 名古屋大学大学院国際開発研究科

ば一冊で完結できる．しかも，2,200 円という価格設定は他書と比べて安価で，学生にはありがたいだろう．以下，本書の内容を簡単に紹介し，その魅力を説明したい．

第 1 部「各国政治史」は，地域に共通する歴史的背景を概観したうえで，各国の政治史を追っていく．第 1 章「国民国家以前の東南アジア」は，歴史を紹介するだけでなく，東南アジアを学ぶ楽しさを伝えてくれる．中心から周辺に向けて漸減していく王の支配が入れ子構造になったマンダラ国家，領土ではなく人間の争奪をめぐる戦争，文明や課税のカテゴリーとしての民族，といった概念を次々と出すことで，今日「常識」とされる西洋近代の概念を揺さぶり，読者の好奇心を喚起していくのだ．

第 2 章「マレーシア，シンガポール，ブルネイ」，第 3 章「フィリピン」，第 4 章「インドネシア，東ティモール」，第 5 章「タイ」，第 6 章「ミャンマー」，第 7 章「ベトナム，ラオス，カンボジア」は，いずれも手堅くまとめられている．各著者も，あえて自説を挑発的に強調するのではなく，重要な事実関係とそれを理解するための分析枠組みの提示に専念している．また，共通の歴史を有する諸国をグループ化することで，章ごとに植民地期から現代までを辿るという繰り返しの単調さを避けている．またグループ化は，各国の共通の歴史と分岐点について理解する助けにもなっている．

第 2 部「比較政治」は，国民国家の建設，権威主義体制の登場，経済成長の実現，民主化といった東南アジア諸国が共通して経験したり，取り組みつつあるテーマを取り上げて，比較する．ここでは，各著者のオリジナルな視座がより自由に活かされているように感じた．

第 8 章「国民国家建設」は，植民地期に設定された境界線の内部で，いかに少数派を「国民」に統合するのかという視点から，各国の特徴を明らかにする．宗教と国民統合の緊張関係や少数派の分離主義についても触れる．第 9 章「政治体制と体制変動」は，冷戦下で大国が介入するなか，被支配層の支持を得た共産主義勢力と，反共を掲げた支配層や軍のどちらが主導権を握ったかに着目し，各国で権威主義体制が成立していった過程を説明する．権威主義体制とひとまとめにされるなかでも，多様な統治の仕組みがあることを理解できる．第 10 章「成長・分配」は，経済成長の実現を目指す各国の取り組みに焦点を当てる．ASEAN5 は西側から支援を得て，外資主導の輸出志向型工業化により経済成長を実現した．社会主義経済の停滞や紛争によって出遅れた後発国も，1990 年代以降低賃金の比較優位を享受するようになった．しかし，外資主導の輸出志向型工業化には「中所得国の罠」や格差の問題がある．それゆえ，資源の分配をめぐる政治が台頭してきた．第 11 章「模索する民主主義」は，民主化を実現した諸国を対象に，「反汚職」を掲げる国民の政治参加，司法の政治介入，紛争に対する軍の介入が，いかに民主主義を不安定化しうるのかを論じる．

第 3 部「国際政治」は，各国の結びつきの特徴を浮かび上がらせていく．第 12 章

「国際関係の中の東南アジア」は，いかに各国が植民地主義や冷戦のもと大国に翻弄されつつも，ASEAN の設立や拡大によって結束を高め，地域の平和・自立・繁栄を模索してきたのか論じる．ただし，冷戦後に中国が経済的・軍事的に台頭するなか，ASEAN は加盟国が中国とさまざまな利害関係をもつので有効な対策をとれていない．第 13 章「地域統合と ASEAN」は，ASEAN の取り組みをより掘り下げる．ASEAN は全会一致と内政不干渉の原則のもと各国の主権を尊重しつつ，リーダー間の信頼を醸成し，カンボジア内戦の終結にも寄与した．高い競争力と生産性を備えた単一市場を目指す経済統合も進んでいる．しかし，民主主義や人権をめぐる態度の違いは大きく，共通の規範に基づく政治統合は進まず，紛争の解決や移民保護の点でも機能していない．第 14 章「国境を越える人々」は，人々の国際移動に，各国がいかに対処しているのかに焦点を当てる．移動者は，合法／非合法，自発／非自発の区分に応じて，労働移民，難民，不法行為者，人身取引の被害者に分類できる．だが実際には，複数のカテゴリーにまたがる曖昧な人々の移動が多くあるので，それを規制したり統治するのは難しい．終章「日本と東南アジア」は，移民の歴史，占領と賠償から始まる経済協力，冷戦後に広がった文化交流や，紛争調停・非伝統的安全保障をめぐる協力関係を紹介する．

繰り返しになるが，本書の特徴は，各国の政治史とテーマごとの論点を，絶妙なバランスで組み合わせたことにある．読み進めていくと，各国政治史の縦糸とテーマの横糸が，美しいタペストリーのように，精巧に織りなされていることに気が付く．たとえば民族問題といった重要なテーマについては，複数の章で繰り返し登場し相互参照されているので，各国政治史，国民統合，国際関係など多様な視点から反復的に理解を深めていくことができる．著者たちは何度も編集会議を開き，どのように各国とテーマ別の情報を組み合わせていくのかをめぐって緻密な調整を図ったに違いない．また，次章のトピックに触れつつ章を閉じるといった工夫もされており，章の繋ぎもよく練られていると感心する．

本書のもうひとつの特徴は，学問領域を超えた「学際性」ないし「多様性」にある．注目すべきことに，5 名の著者のうち，政治学者は増原綾子・鈴木絢女・古屋博子の 3 名だけである．宮脇聡史は宗教社会学者，片岡樹にいたっては文化人類学者である．この学際的な執筆陣は，「政治」に関する教科書を執筆するという目的からすれば変則的かもしれない．だが，これが大成功している．オーソドックスな政治学は，国家，制度，アクターなどに焦点を当てることで，文化や宗教といったトピックを周縁化してしまいがちだ．だが，そうした政治学の傾向を，学際的な執筆陣によって補正しているのが素晴らしい．とりわけ片岡は，「国民国家以前の東南アジア」，「国民国家建設」，「国境を超える人々」の各章に，少数派に関する文化人類学者ならではの視座や分析を持ち込んで，本書の射程を広げている．この学際性によって，本書は「東南アジアを事例にした比較政治

学」はもとより，「対象を丸ごと理解する地域研究の政治学」としての特徴も得ている．また，古屋が民間企業で働く在野の研究者であることも，大学人が陥りがちな視野狭窄な独り善がりを中和して，本書をより読者に寄り添ったものにすることに寄与しているかもしれない．

最後に，相次ぐ教科書の出版がもつ意味について検討したい．統計的なデータが手元にあるわけではないが，近年の出版不況のなか，各出版社がより確実に収益を見込める企画を重視することで，教科書の出版ブームが生じているようだ．評者自身，既に2つの企画に関わらせてもらったことがある．多くの研究者が切磋琢磨してより良い教科書を作ろうとするのは，教員と学生にとって大きなメリットである．本書が優れたものになったのも，著者たちが従来の教科書を研究して，それらを超えるものを作ろうとしたからであろう．また，著者の多くは別の教科書企画にも携わったことがあり，その経験は本書に寄与しているに違いない．

しかし，多くの研究者が自身の研究を深める時間や労力を犠牲にして，教科書の執筆で忙しくなる状況には，望ましくない側面もあるだろう．出版市場の論理が，研究者の活動を規定してしまっているのではないかという懸念も頭をよぎる．ただし，教科書を執筆するという経験は，研究者にとって回り道ではあるが，自らの狭い専門を超えてより幅広い知識や視座を得るきっかけにもなりうる．本書を優れたものにしているのも，そうした学際的な視座であった．教科書の出版ブームが，東南アジア政治研究の足かせではなく，さらなる深化のきっかけになることを願っている．

佐藤　仁.『反転する環境国家―「持続可能性」の罠をこえて』名古屋大学出版会，2019年，366 p.

生方史数 *

世界がパンデミックと向きあうなか，国家指導者の一挙一動に注目が集まっている．一般に，危機の時代には国家のリーダーシップが期待されるといわれるが，国家や指導者が危機に際して実際にどのような役割を演じたのかは，学問的に検討されるべき課題であろう．

本書は環境問題や自然災害といった「危機」に対する国家のふるまいを，環境国家の反転―すなわち「『環境保護』の大義のもとに，地域の人々の生活が国家の枠組みに翻弄されて，人々と自然環境との関係がかえって悪化していくこと」（まえがき pp. iii–iv）という独自の概念を用いて分析している．ここで環境国家とは，著者の定義では「環境保護や資源の持続可能性確保を目的に行われる介入の影響が，自然環境だけでなくその地域の人々の暮らし全体に及ぶようになった国家」（p. 12）のことを指す．世界全体が環境対策を迫られる今日，このような国家の想定は途上国であっても意外ではない．しかも，一般に環境対策では国家に多くの期待が寄せられ

* 岡山大学大学院環境生命科学研究科

るため，介入は好意的に捉えられることが多い．

しかし著者は，この国家の介入が，「環境そのものの管理から，知らず知らず人間社会の管理へと深く侵蝕してきたのではないか」（まえがき p. iii）と問題を提起する．人と自然の関係への介入を意図する環境対策が，その意図にかかわらず人と人（特に国家と社会）の関係を変質させる過程に着目しているのである．では，反転する環境国家はどのように形成され，環境保全の現場にどう影響を与えるのか．そして，反転をくい止めるには何が必要なのか．

本書は，上の 3 つの問いに対応した 3 部構成となっている．序章と第 1 部（環境国家をどう見るか）では，本書の枠組みを理論的に位置づけるとともに，環境国家の端緒を歴史のなかにみていく．まず序章では，問題意識と枠組みが詳述される．ここで重要なのは，環境国家と開発国家を相互連鎖する関係として描いている点である．すなわち，環境国家を開発国家による副作用への対応とみなすとともに，環境国家の反転がインフラ整備などの「さらなる開発」を招来することで，開発国家としての側面を強化していくという循環である．特に，圧縮された近代化が進む途上国においては，開発国家から環境国家への移行に時間的な余裕がないため，この循環が加速してしまう．後発性の利益として捉えられがちなこの同時性は，本書では制約とみなされるのである．

第 1 章では，環境国家が自らの介入を正当化するために行なうフレーミングについて論じている．環境問題はあいまいで不確実性が大きいため，解釈の幅が広くさまざまなフレーミングが可能である．それゆえ国家は専門家による翻訳などを駆使しながら，シンプルで受け入れやすく，吟味や反証もされにくいフレーミングを社会に浸透させていく．続く第 2 章では，環境国家が環境の支配を介して人間を支配するメカニズムが示される．ウィットフォーゲルの水力社会にみられるように，資源管理はその資源を管理する人間の管理を喚起する．それはやがて他の目的に転用され，人の支配の全面的強化につながっていく．そして，資源管理から環境管理へと統治領域を拡張するなかで，国家はさまざまな動機や手段を用いて介入を行ない，権力を集中させていく．

第 3 章では，環境国家の萌芽を，19 世紀中頃から近代化に着手した日本とシャムにおける森林と鉱山管理の歴史から読み解いている．検討からみえてきたのは，日本での人々を包摂する過程とシャムでの排除的な過程という対照的な径路であった．両者を分けた要因を，歴史的・地域的文脈から生じる国家と社会の関係や国家権力の浸透度に見出し，反転の種は近代国家形成の初期に蒔かれていたと論じている．

第 2 部（環境国家とアジアの人々）では，国家権力がどのように地域社会に入り込み，自らを維持したり，場合によっては撤退したりするのかを，東南アジアの事例から具体的にみていく．第 4 章では，主にインドネシアの灌漑施設の事例から，国家によるインフラ建設が「維持への強制（事業維持のために

否応なく必要になる作業がもたらす規律)」を招来し，水路の維持管理作業への動員を通じて現場に国家権力を呼び込んでいく過程を論じている．灌漑の導入は，副産物として水需要や公衆衛生上の問題も呼び込むため，国家介入はさらに深化する．こうして住民に歓迎されやすい国家事業も国家への新たな依存をつくりだし，反転へとつながっていく．

第5章では，不確実な自然のふるまいに備える力が国家と地域社会でどう異なり，自然災害を契機に両者の関係がどう変わるのかを，2004年インド洋大津波で被災したタイ南部の事例から論じている．現地では，公共地をめぐる国家と地域住民のせめぎあいが復興過程で土地紛争として顕在化した．災害対策という国家の備えが，地域社会の備えと衝突することで反転をもたらしたのである．しかし一方で，地域社会が国家による取り込みの力をかわす生活防衛をとったことも指摘し，これを新しいモラル・エコノミーとして評価している．第6章では，カンボジア・トンレサップで漁区システムが全面開放された事例から，国家が資源を囲い込むのではなく，逆に囲い込んだ資源を手放すことで自らの影響力を維持拡大する過程を論じている．「地域への権限委譲」というポピュリズム的な口実で行なわれたこの開放は，結果的に資源の乱獲と住民間の係争をもたらした．このことから，資源へのアクセス操作は，それが「手放す」という通常と逆の操作であっても反転をもたらしうると指摘する．

第3部（反転をくい止める日本の知）では，反転をくい止めるための国家や社会のあり方を，主に日本で育まれた知を手がかりに論じている．第7章では，「文明の生態史観」をはじめとする京都学派の貢献とスコットのゾミア論を手がかりに，国家のくくりを取り払って考える脱国家論が，環境国家の反転という仮説に与える示唆を考察している．第8章では，日本の公害運動に大きな影響を与えた宇井純による「公害原論」をもとに，環境国家が特権を与える近代科学が暗黙知を無効化することでもたらされる反転について論じ，反転を防止する知のあり方を考察している．第9章では，「開発即保全」をモットーに，自然の一体性を生かすために行政の縦割りを克服しようとした戦後日本の資源調査会に光を当て，反転を生じさせない行政のあり方を検討している．

そして終章では，環境国家の反転をくい止めるために何ができるかをまとめている．「解決手段」が新たな問題をつくりだす環境国家の反転から示唆されるのは，事後的な「手段の改良」に注目を集中する環境ガバナンス論の限界である．問題をつくらないために開発主義を変質させ，問題の立て方を民主化すること，地域社会の対応力を養うこと，政策の縦割りを克服し，開発政策に環境保全政策を内包させることを提案し，環境国家の時代に求めるべき理想を自立でなくよい依存関係に見出して締めくくっている．

本書の特徴は，何といってもその枠組みである．地域研究者がこれまでみてきたような，国家主導の開発や環境対策が地域に与える負の側面が，ブラックボックスにされがちな国家の側から分析されている．なかでも開

発国家と環境国家の連鎖への注目は特筆に値する．著者が述べるとおり，どちらも「現場に何らかの不足を見出し，外からその不足を埋め合わせるための資源を持ち込むという開発国家のエートス」（p. 284）を保持するからである．かくして開発主義から生じた問題は，「持続可能な開発」のもとでさらなる開発主義へとつながる．筆者はここ数年ベトナムでPFES（森林環境サービスへの支払）の研究を行なってきたが，この点は全く同感である．

また，自然環境への働きかけという一見非政治的な国家のふるまいが，その非政治的装いゆえに非常に政治的な結果を生み出しているという「環境対策の隠れた政治性」を，多彩な理論と現場の情報を駆使して明らかにしている点も，本書の大きな魅力である．たとえば，水力社会や社会的財の概念を援用して，環境の統治が人の支配に転用される点を論じるくだりや，本書第 2 部で示される反転のさまざまなバリエーションの解釈は鮮やかで説得力がある．さらには，第 3 部でそれまでに検討した内容を実践的提言に的確に結び付けている点も，著者の真摯な姿勢を感じさせる．

一方で，読んでみて気になる点がないわけでもない．その第 1 は，著者が用いる「反転」には，環境の支配が人の支配に転じるという意味と，それが結局人と自然の関係の悪化を通じて持続可能性を脅かすという意味が含まれており，両者が明確には区別されていない点である．特に後者に関しては，中国の例から著者も認めるように，その妥当性は必ずしも自明ではない．「自然環境に接しながら暮らしている人々が排除されるとなれば，彼らの国家に対する信頼は崩壊し，環境政策そのものが実効性を失ってしまう」（p. 292）のかもしれないが，両者がどうつながるのかをもう少し吟味する試みがあってもよかったのではないか．第 2 は，国家をやや単純化しすぎていないかという点である．国家は人が動かすとみるか，人は国家組織に回収されるとみるか．本書は主に後者の視点に立つので「ないものねだり」なのだが，いくつかの章を除いて国家を動かす人たちの「顔」がみえにくいと感じた．本書を読んで，国家とは何か？という素朴な疑問が浮かんだのは，そのせいだろう．

ともあれ，世の関心はパンデミック一色である．ある意味では，「危機」の少し前という本書の出版は時宜に適っていた．危機の時代の国家を考えるうえで，本書は有益な示唆を与えるからである．それは，多くの場合「危機」は外生変数ではなく，システム自体がつくりだす内生変数だということである．著者が今回のパンデミックをどうみるのかをぜひ聞いてみたいと思った．

小野林太郎・長津一史・印東道子編．『海民の移動誌―西太平洋のネットワーク社会』昭和堂，2018 年，400 p.

中野真備 *

本書は，国立民族学博物館の共同研究「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

社会の人類史的研究―資源利用と物質文化の時空間比較」（研究代表者：小野林太郎，2012～2015 年度）の研究成果を基に刊行されたものである．表題に掲げられた西太平洋という広域を東アジア海域，東南アジア海域，オセアニア海域の 3 つの空間軸に分け，また考古学的時間軸と民族誌的時間軸という 2 つの時間軸を設定し，ヒト・モノ・情報の移動を通して海域ネットワーク社会の構造や歴史を解明する．全体は 3 つの海域別に，2 つの時間軸による事例が対比的に配置される．

第 I 部では，第 1 章で「海民の移動誌とその視座」が述べられ，第 2 章で「海のエスノ・ネットワーク論と海民―異文化交流の担い手は誰か」を秋道智彌が論じる．民族集団は文化的・経済的・政治的に多様な「エスノ・ネットワーク」を形成してきたという．そのため資源や技術とその流通に関与する集団の差異と，集団間の交易を可能にする言語の重要さを指摘する．第 3 章で「マダガスカル島と海域アジアを結ぶネットワーク」を飯田卓が論じる．交易航路を動くモノやヒトに着目すると，インフラ整備や政治経済的状況の変化が，ネットワークの転換点になったと指摘する．

両論文は，3 つの空間軸と 2 つの時間軸から海域ネットワークを捉える際に有用な枠組みや因子を提示したものである．

第 II 部では，東南アジア海域のネットワークについて，4 つの論文とコラムが収められている．第 4 章の田中和彦・小野林太郎による「海域東南アジアの先史時代とネットワークの成立過程―『海民』の基層文化論」は，先史時代ウォーレシア海域の集団に，半農半漁的な「海民」性や，海を介する流通ネットワークがあったとし，ここを海域アジアの基層文化のはじまりとみなすことが必要であるとする．

第 5 章の深山絵美梨による「耳飾が語る金属器時代東南アジアの海域ネットワーク」は，金属器時代の耳飾工人の環境や知識，技術の背景を検討した．それに基づく仮説として，工人は南シナ海の海域ネットワークの媒介者たり得る回遊的職能民であり，ある種の海民であったと指摘する．

第 6 章の長津一史による「東南アジアにみる海民の移動とネットワーク―西セレベス海道に焦点をおいて」は，海に住まうバジャウ人の越境移動を「海の資源のフロンティア」，「商業の空間と特殊海産物」，「近代国家の空間と越境」，「暴力との相互作用」と特徴づけた．これらの特徴は，バジャウ人同士の人間関係，またはバジャウ人と他の民族や社会集団との人間関係というつながりによって生成されたと指摘する．

第 7 章の鈴木佑記による「〈踊り場〉のネットワーク―モーケンと仲買人の関係性に着目して」は，船上生活時代のモーケン人は，仲買人と強力で固定的なパトロン―クライアント関係にあったが，1980 年代以降は仲買人を吟味して選択するようになり，緩やかな関係性を築いたとする．多種多様の人間を巻き込む「ネットワーク型社会」では，仲買人を基軸とする移動性と多民族性が特徴であると指摘する．

この部をまとめると，東南アジア海域の「海民」の特徴は，考古学的時間軸では，価値のある資源を運ぶトレーダーや工人としての個人や集団であったのに対し，民族誌的時間軸においては商業志向が高く，特定の関係に依存しない個人であったことである．

第Ⅲ部では，東アジア海域のネットワークについて 3 つの論文とコラムが収められる．第 8 章の山極海嗣による「海を渡り，島を移動して生きた最初期の『海民的』人びと―宮古・八重山諸島の先史時代からみた海域ネットワーク」は，先史時代の海民がネットワークを拡大する志向をもたず，限られた空間で利用可能な資源を幅広く活用し，それが地域性へとつながったと指摘する．

第 9 章の島袋綾野による「中世・近世期における八重山諸島とその島嶼間ネットワーク」は，中・近世期にも，島嶼間の移動は限定的であったとし，表象される物質文化や精神文化が地域性を残し続けたと述べる．

第 10 章の玉城毅による「糸満漁民の移住とネットワークの動態」は，「門」と呼ばれる海岸の宅地群（埠頭）の形成に，兄弟の協力的な関係が重要であったとする．糸満の親族関係には，祖先や子孫といった観念的な関係に加え，生業や経済活動において協力し合う兄弟関係があり，両者が合わさる親族ネットワークが，漁民の移住を可能にしてきたと述べる．また，前者の関係性は東アジア的な要素であり，後者は東南アジア的な要素であると指摘する．

この部をまとめると，東アジア海域の「海民」の特徴は，考古学的時間でみればネットワークの拡大に消極的であった一方，民族誌的時間でみれば柔軟なネットワーク形成などの東南アジア的な要素を兼ね備えていたことである．

第Ⅳ部では，オセアニアの海域ネットワークについて 3 つの論文とコラムが収められる．第 11 章の小野による「先史オセアニアの海域ネットワーク―オセアニアに進出したラピタ人と海民論」は，アジア方面から移住してきた集団とニア・オセアニア（メラネシア）先住の集団との文化的混合に注目する．そしてラピタ人の「半農半漁」，「漁撈採集民」的な要素が，現代の東南アジア海域の海民に通じることを指摘する．

第 12 章の印東道子による「オセアニアの島嶼間ネットワークとその形成過程」は，島嶼間の相違はお互いに補完される関係にあったとしたうえで，経済的な互助関係や非常時の相互扶助がネットワークを維持させたと指摘する．また，陸上を生活の基盤としつつも，島嶼間交易や島嶼部の資源を利用するなど，海域に進出していた点で広義の海民であると述べる．

第 13 章の深田淳太郎による「ムシロガイ交易からみる地域史―進行形のネットワーク記述に向けて」は，メラネシアの伝統的な貝貨のうち，ムシロガイ交易だけが継続したことに着目する．その背景には，採集地や採集者，運搬方法，交易経路，販売方法が複数あり，それらが常に変わり続けたことで，社会や環境の変化に対応できたことがあると指摘する．加えて偶発的な個人の行為や才覚の実践もあったと述べる．

この部をまとめると，オセアニア海域の「海民」は，考古学的な時間軸では，特定集団間の資源を交換したり，島嶼部の資源を利用したりして海域を利用した人びとであり，民族誌的な時間軸では，資源を得るための交易ルートを柔軟に変化させ，社会や環境の変化に対応してきた人びとである．

本書では，海域ネットワークのメインアクターとなる人びとを広義の「海民」とみなすことで，異なる時間軸・空間軸からの検討を可能にした．海民を「海に生計・生活の基盤を置き」，「多様な生業や資源利用」を特徴として暮らす人びとであるとしたことで，新たな分野横断的研究書となったのである．

ただし，本書では，「狭義の海民」や「広義の海民」という表現が多く用いられ，それぞれの時間軸・空間軸に登場するアクターが，どの程度「海民」的であるかという言及をしている．その結果，3つの海域それぞれの海民的要素の差異が明確になったが，「海民」の定義について総合的に定義することの難しさも示唆された．あるいは，一般化したイメージを追求することが，却って各地域に特異な海民的要素からの乖離につながるともいえる．特に，本書で扱う「海民」とは，その時代や地域に存在したはずの漁民とは必ずしも一致しないことにも留意する必要がある．合意性の高い定義から，さらに多様な「海民」像を求めたことに本書のジレンマがある．

また，考古学的痕跡からは「海民」的要素を見出すことが困難な場合もあるし，民族誌的成果は過去に遡るほど不確かなものになりがちである．たとえば，第5章において，耳飾工作の工人は「制作技術・知識を携え，海を渡り，仕事を終えて故地に戻る職能集団」であり，「南シナ海の海域ネットワークの媒介者たり得る回遊的職能民」であり，そして「文化的・経済的枠組のなかで海を渡る，ある種の海民」とされるものの，これが第1章で定義される海民に該当するというのは解釈が拡大されすぎている印象である．

また第3章が，9世紀頃にマダガスカル島に移住してきた人びとを，沈没船の発掘や政治経済状況の記録，比較言語学から推察したが，いずれも状況証拠にすぎない．第13章が指摘するように，「社会環境などの要素に還元できない，偶発的な個人の行為や才覚」があることも考慮しなければならない．このように考古学的時間軸と民族誌的時間軸に挟まれた，空白の時間をどのように扱うかも課題であろう．

以上に述べたような限界があった一方で，本書は海域ネットワークとその担い手である「海民」像を同質化しなかった点が優れていた．「海民」を扱うことのむずかしさを認めつつも，それぞれの研究分野の視点から捉え得る多様な「ネットワーク」を描出したことで，新たな海民研究・海域研究として優れていた．

また各章を空間軸でまとめたことにより，双方の時間軸が重なる事実関係についての新たな知見もみられた．そして本書が3つの空間軸を設けたことで，海域によるネットワークの違いが明らかになった．東南アジア海域の海民は，商業的志向に基づくためネッ

トワークは柔軟であり，多方向的に拡大した一方，オセアニア海域の海民は，特定集団同士の交換を目的とするため，移動航海は一定の地域内で循環し，完結した．また，東アジア海域においては，これら両方の要素を兼ね備えていた．

空間も時間も超えた海域ネットワークが広く論じられたことはこれまでの「海民」研究を再考させるものであり，今後も参照され続ける良著であろう．

鶴田　綾.『ジェノサイド再考―歴史のなかのルワンダ』名古屋大学出版会，2018 年，vi＋352 p.

近藤有希子 *

歴史はいかに描けるだろうか．

本書は，多数派民族集団の「フトゥ」による少数派の「トゥチ」に対する大量殺戮として，これまで，ともすると安易な単純化のもとに描かれてきたルワンダのジェノサイドを取り上げて，その「標準的な説明」（p. 1）の刷新に向けて，果敢に取り組んだ労作である．

著者をして「停滞」（p. 5）した印象を抱かせるルワンダの歴史研究に対して，著者はいくつかの分析視角を携えて挑戦している．ひとつに，著名な歴史家の提言にもあるように，歴史のダイナミズムや当時のモメンタムを捉え損なわないようにすること．ひとつに，トゥチやフトゥ，ベルギー人といった集団間関係の考究とともに，集団内の関係や対立にも目を向けること．ひとつに，国内・国際・ローカルという各層の政治レベルの交錯に敏感であること．

なかでも，著者は 1950 年代および 1960 年代という，アフリカ各国で独立が達成された重要な局面に焦点をあてる．ルワンダについては，「フトゥによるトゥチ王国の打倒」が達成された時期として一元的に説明されてきた期間である．植民地帝国から離脱したこの時代を核心として，著者は過去から現在に至る「紆余曲折」，つまり「暴力回避や『和解』への提案，暴力的でない未来の可能性」（p. 22）を追求してきた．

そのときの手法は，各国に散逸してきた史資料の分析を中心としている．度重なる紛争によって被害を被ったルワンダの公文書館の脆弱さゆえに，旧宗主国であるベルギーにはじまり，米国，英国，イタリアと，文字どおり世界中の公文書館や図書館を飛び回って，現在に至る「ルワンダ」，および本書の関心となる「ジェノサイド」を構成する断片を収集している．

以下，全体の構成を概観する．

第 I 部では，1950 年代前半までのルワンダが対象にされる．まず第 1 章で，植民地化以前の 19 世紀～20 世紀中盤，エスニシティが国家形成の過程のなかで漸進的に形成されてきたこと，それが植民地支配のもとで明確化・固定化されたことが確認された．さらに，トゥチとフトゥの関係や国家権力の影響には地方ごとの差異があり，トゥチのリー

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ダーのあいだで権力争いが存在したことにも注意が向けられた．

第2章では，1950年代中盤から1959年秋までに焦点をあてて，革命直前のルワンダでおこなわれた改革と政党政治のはじまりが論考される．1950年代後半，トゥチの伝統的指導者と革新的エリートの対立にはじまり，続いてフトゥのエリートたちが政治的・社会的不平等の是正に向けた改革を求めるようになった．しかしここでの要点として，フトゥのエリートたちがこの時点において革命を志向していたわけではないことが明かされる．

本書の主題は第II部であり，革命および独立の過程が入念に省察されていく．第3章では，1959年11月に起きた万聖節の騒乱について，その具体的な過程とベルギーの対応，そしてその影響が追究される．暴力はルワンダ中央部で発生し，当初はトゥチ・フトゥの双方向的なものとされた．しかし，その広がりに目を向けてみれば，各地の人口密度や土地不足の状況とともに，王宮との歴史的な関係が，地域ごとの暴力発生の相違を生み出していたことが検証される．

1959年に発生した暴力は，ただちにトゥチとフトゥの集団の対立として形成されたわけではない．第4章では，1960年代初頭の政党協調と対立の萌芽について探求される．当初対立していたのは，トゥチの伝統的リーダーとその他であったことが強調され，1960年代前半には立憲君主制や連邦制などの構想が出されていた．政党間には合従連衡関係が存在し，トゥチとフトゥとの関係は対立的なだけではなく，協調の可能性が残されていたことが明示される．

第5章では，1960年～1961年の革命が発生する過程について解明される．1961年1月末にフトゥ政治家によるクーデターが起き，トゥチの王制が実質的に廃止されたことによって革命が完遂するが，そこにはコンゴの独立，ベルギーの政策変更，および冷戦にかかわる国連での論議が，つよく影響を与えたことが示された．

第6章では，クーデター後から1962年7月にルワンダが独立を果たすまでの過程が精査される．1961年までのルワンダには，隣国のブルンディやコンゴとの政治連合や共同体など，さまざまな「国家」の可能性が存在していた．しかし結局，ルワンダはベルギーとの関係を維持したまま単独の主権国家として独立する．この間，暴力の性質も器物や住居の破損から殺害へとエスカレートしていた．

第III部では，革命・独立後のフトゥ共和制下における政治，およびトゥチ・フトゥの関係について点検される．第7章では，独立後のフトゥ政権期における国内の政治や国際関係が辿られた．初代大統領であるカイバンダ政権において一党体制が成立した後には，党内部，とくに地域間の対立が重要になり，それはそれ以降のルワンダ政治を規定していくものとなる．この時期，国際関係においては国外の難民と援助関係が重要な課題としてあった．

本書の「出発点」（p. 196）と目されるジェノサイドについて，第8章で説明される．そこでは，内戦と複数政党制の導入が同時に

進む状況下において，ルワンダ国内は急進派が力をもつ暴力的な空間になっていったことが言及される．

第 IV 部では，ジェノサイド後のルワンダが描写される．第 9 章では，1994 年以降の「新しいルワンダ」をつくる取り組みが，政治・経済・国際社会とのかかわりといった側面からひろく取り上げられた．

第 10 章では，植民地時代に西欧から持ち込まれたハム仮説に影響を受けた，各々の権力者による歴史認識が考察される．同時に，著者自身がルワンダでおこなった聞き取り調査から，「正史」とは異なる多様な記憶が存在していることが浮かびあがる．

著者はあくまで歴史を「実証」（p. 28）することにこだわり，それを手放すことなく，紙資料をもとに堅実に記述を積み重ねていく．そのことによって，「トゥチ」「フトゥ」「ベルギー」「国連」など，一枚岩ではない集団の解体を試みる．主として扱う資料は異なるものの，基本的にそのような姿勢は人類学を学ぶ評者と軌を一にする．なにより，1950 年代および 1960 年代のルワンダで，政党間の対立に限らない，協力的な関係の生成する可能性をうかがわせた描写は，現在のルワンダの権威主義的な体制を前にしては見いだせないものであり，刹那であるが鮮やかな躍動感を感じさせるものであった．

とはいえ，現存する限られた紙資料でそれに取り組むことによって零れ落ちてしまうものがあることは，著者自身も自覚しているとおりである（pp. 314–315）．つまり，それらの資料は多くが力を有する男性のあいだを行き来して残されてきたものであり，女性や子ども，農民といった多様な「普通の人びと」の存在，その「普通の人びと」の多義的な振る舞いが可視化されにくい．

そのことによって，「トゥチとフトゥの対立がいかに形成されてきたのか」という本書における重要な問い，つまりエスニシティが政治化する過程についての説明も，一般大衆の側からそれを思考しようとすれば，限界を感じる部分もあった．フトゥ上層部に「トゥチ」というカテゴリーを一纏めにして，「（自分たちを）殺しに来る」（p. 140）「敵」とみなす発言をする者がいたとしても，それを一般の人びとがそのまま受容していったか否かについては検討の余地がある．なぜなら，同一村内に暮らすトゥチとフトゥとは，日常の対面的な次元において，避けがたくのっぴきならない関係性のなかを生きてきた．このとき，フトゥによる破壊行為や略奪が「労働（*gukora*）」と呼ばれていたことにもみられるように（p. 156），日常の延長において暴力の意味を議論しなおしてみる必要があるだろう．

他方で，1994 年以降のルワンダに関する膨大な研究蓄積を前にして，逆説的にも明示されてしまうのは，歴史は描き切れない，ということなのかもしれない．さらに，それらは書かれた歴史を受容する側の時代的，文化的背景にも依存するものでもある．そうであっても，描くことにおいて描かれなかった物事にやっと光が当たり，書かれたものが読まれることで新たな解釈が生まれるのであっ

て，こうした再帰的な営みを，私たち―著者も，評者も，そして読者も―はずっと続けていくのだと思う．歴史を扱う意味について，著者は「望ましい未来についても構想する」（p. 22）ことだと述べ，そこにはある種の祈りのような感情が織り込まれている．昨今のルワンダにかかわる数多の研究者が補い合うなかで，あくまで「書く」という力に自覚的になることにおいて，すこしでも「望ましい未来」を創るためにこそ，私たちは書き続けることを諦めるわけにはいかないのだろう．

著者は幾度か自問する．「歴史に『もし』はないが」（p. 81）と．果たしてそうだろうか？たしかに，起こってしまった出来事を変えることは難しい．ただし，過去は変えられる―．それは，ルワンダの各政権がおこなってきたような，権力者による歴史認識の操作によってだけではない．それは，著者自身がルワンダの人びとに相対するなかで歴史の「上書き」（p. 82）の可能性に触れているように，個々人の認識の次元においても達成されうる．さらには，人びとの身体に積み重なってきた歴史は，突如として不用意に表出するものでもある．そうした個々の記憶のあり方は，著者がジョージ・オーウェルを引用して記すような，過去から未来に至る時間を「コントロールする」（p. 312）力の間隙をすり抜けてゆく．実直な紙資料の解きほぐしの先に，「もし」を覆しうる状況的な真実との格闘へと開かれていくことを，評者は待望している．

歴史はいかに描けるだろうか．本書はこの困難な問いを，私たちに突きつけてくれる．

大石高典・近藤祉秋・池田光穂編．『犬からみた人類史』勉誠出版，2019 年，499 p.

樺澤麻美 *

本書は，総勢 23 名の異なる分野―人類学，民俗学，動物行動学，生態学，遺伝学，動物考古学，動物心理学，科学史，環境学，狩猟，アート―の著者が，人類と犬とのかかわりの多様性とその変遷を，「犬の視点」からみた人類史として考察している．その時間的枠組みは一万年以上前から現代そして未来を眺望し，日本列島，東アジア，ヒマラヤ，アメリカ，オセアニア，アフリカ，西ヨーロッパと，人と犬が生活している世界中の地域を扱っている．本書の構成は，序章と 3 部 19 章と 5 つのコラムと 52 語のグロッサリーからなる．

序章で，まず，人類と犬の出会いを「二足歩行の開始，農牧革命，産業革命などとならぶ人類史を画するできごと」（p. 6）と位置づけ，これを「犬革命」としている．この革命は人類史のある時点の前後で劇的な変化を起こしたわけではなく，また人と犬は生物学的に依存した関係ではないが，その関係は一万年以上にわたって「強制的な手段に寄らない，社会的なコミュニケーションに基づいた異なる社会性動物どうしの共生状況」（p. 19）が，継続的に両者に影響を与えているとしている．また，本書のキーワードとして，「犬の学習とトレーニング」，「犬を飼う

* 京都大学アフリカ地域研究資料センター

ことの『コスト』，「犬への愛着にまつわる『コスト』」を挙げている．

第 1 部では，オオカミと犬の共通祖先から，犬がわかれて，人と共生を始めるプロセスを考察している．そのプロセスにおいて，人が新石器革命を経て，狩猟採集生活から牧畜農耕生活を開始する流れのなかで，犬は「吠え」をコントロールするようになり（第 1 章），また，オオカミよりも活動的で社交的で人の社会により受け入れられやすい性格をもつようになった（第 4 章）．また，オオカミとは異なる黒目強調型の眼に進化することで，人からかわいいと思われ，その犬と人が視線を交わすことでお互いにオキシトシンを発生させ，親子関係に似た愛着関係をもたせると考察している（第 5 章）．

第 2 部では，犬と人の関係が定着するなかで，その共生関係がどのように展開してきたかを描いている．アフリカ（第 7 章）と日本（第 8 章，第 9 章，第 14 章）の狩猟における犬の役割と猟師と犬の関係，アラスカ（第 10 章）とアイヌ（第 11 章）における犬ぞりの利用といった，異なる自然環境や条件における，人と犬の間のコミュニケーションと協働関係を描いている．そこでは，犬が単なる「道具」として維持管理される一面，パートナーとしてのある種の愛着あるいは敬意をもって接せられていることもうかがえる．第 12 章では，近代日本の国家主義・軍国主義の時代に，忠犬ハチ公の逸話から，日本における「日本犬」観がどのように「忠君愛国」のアイコンとして取り込まれていったかを紹介している．第 13 章では同じ時代に，明治維新以降流入してきたさまざまな洋犬との雑種化を防ぐべく，日本犬保存会が発足し，犬の外見を基に「日本犬標準」が設定されるなか，犬種がいかに「合成」され，後に衰退していったかを紀州犬を例に記している．

第 3 部では，人と犬との関係を現代から未来について展望している．「人間化する犬」として，「犬の死」の扱われ方の変遷（第 16 章），犬を「パートナー」として同居するドイツの動物性愛者の生活（第 17 章），先進国での犬のアトピー性皮膚炎の要因と対処法が人のそれに類似していること（コラム 4），野生シカ肉の消費者としての犬（コラム 5）が挙げられている．また，人と犬の共存と境界線という点から，人間社会と併存するブータンの街の犬社会（第 18 章）やダナ・ハラウェイによる「コンパニオン・スピーシーズ」の概念を紹介している（第 19 章）．

本書で最も評者の印象に残った章は，第 15 章「境界で吠える犬たち―人類学と小説の間で」であった．筆者の菅原和孝は幼少期の体験から犬を怖いと思いながらも，犬が登場する小説を読みふけり，犬を飼うことを夢見た思春期を経て，フィールドワーカーとして，カラハリでグイという狩猟採集民と彼らのやせこけた猟犬たちと過ごすのである．グイの人と犬との間で太古の昔に交わされたであろう社会的契約―人の猟を手伝う代償として，犬はシェルターと餌を得る―において，筆者は「ろくすっぽ餌ももらえず，あばらを浮きださせ，人糞を食って命をつないでいるカラハリの犬たちを見るたびに，私は，契約

を裏切っているのは人間の方ではないか，と疑わざるえない.」（p. 361）と語っている．また，筆者は犬の純真さこそが「犬」という実存の可能性の中心にあり，「《犬とは最愛の人よりも先に死ぬ実存である.》」と定義している．この純真さを都合よく利用し，その理由を正当化してきた人と犬との一万年以上もの関係は，人と自然資源や環境，人間社会における搾取する者とされる者との関係を思い起こさせる．

本書を読むにあたって，まずはグロッサリーを一読されることをお勧めする．意味を覚える必要は無いが，これらの用語は本書を理解するうえで，サブキーワードともいえる．また，本書の随所で引用されている，ダナ・ハラウェイの著書「伴侶種宣言―人と犬の『重要な他者性』」［2013］と「犬と人が出会うとき―異種協働のポリティクス」［2013］を参考図書として併読することを勧める．

本書では猟犬や犬を使った猟法やそれを行なう人びとに関連した話が頻繁に出てくる（第 2 章，第 7 章，第 8 章，第 9 章，第 14 章，第 15 章）．人類史において，狩猟の分野での犬の役割や人との関係がそれだけ重要であったということの表れであろうが，「犬の視点から人類史を考察する」といった興味深く，そして多くの想像力を駆り立てる目標を掲げていればこそ，もう少し他の視点に関しても紙面を割いて，議論を展開してほしかった．たとえば，現代の犬肉食文化についての論説が少ないのが残念である．犬肉食文化は西洋化する社会のなかでタブー視されているが，評者が知る限りでは，東アジアや東南アジアの国ではまだまだ広く食されており，その一方でペットとして服を着させられた犬を同じ街角で見かける．あとがきのなかで，本書の企画の発端となった「狗類学」のチームで大阪市内の犬が食べられるレストランに行った，海外で肉食用に育てられた犬の肉を美味に感じた，といった記載があるが，日本での犬肉食文化についても言及してほしかった．同様に，犬に関する法規，ペット市場の殺処分，保護犬，介助犬，麻薬・爆発物探知犬，犬型ロボットについても，本書のなかで扱ってほしい事項であった．また，序章では，第 3 部において，「現代社会の『人間化する犬』と『犬化する人間』の混交状況が語られる.」とあるが，「人間化する犬」は明確であったが，「犬化する人間」に関しては評者には読み取れなかったため，片側だけの理解で終わってしまった．

人と犬の共生において，これまでは，犬側が人の社会に受け入れられるために進化してきたという印象を受けた．一方で，人はどうであろうか？世界の一部とはいえ，グローバル化が進んだ社会での犬肉食や殺処分に対する批判が高まってきており，それに伴い関連する法規改正も行なわれてきている．飼い主の多くは犬を家族の一員として扱い，ペットフードの多様化や高級化だけでなく，ペットのための服，トリミング，マッサージ，保険，医療，介護，義肢，ホテル，ペットと住める住宅といったあらゆる「サービス」が彼らのために用意されており，経済や産業の一部となっているといっても過言ではないだろ

う．ちょうど本書を読んでいる時，世界各地ではコロナ感染防止のため外出禁止令が出されていた．感染被害が深刻な欧米の一部の国々でも，犬の散歩は食料・日用品・医薬品の確保といった生活に必要な活動と同様に，一定の条件は伴うものの許可されていた．長い共生関係のなかで，これまでは，どちらかというと人は自分たちの目的や状況に応じて，犬を時には「道具」「食糧」，時には「友」「パートナー」として都合よく扱ってきたが，犬が人間の愛着を勝ち取り，人間をその愛着に依存させることで，「人間こそが犬にとっての〈愛情の寄生虫〉」（p. 450）となり，徐々にこの関係性が変化してきているのではなかろうかとも思う．

本書により，人間の文化・社会・生活様式の多様性と複雑さが，そのまま人と犬の関係の多様性と複雑さを照射していることが理解できた．また，身近な存在である犬と人の関係と共生について考察するとともに，「『人はいかに他者と共存できるか』を考えること」（p. 20）の機会を与えてくれた．

引　用　文　献

ハラウェイ，ダナ．2013.「伴侶種宣言―人と犬の『重要な他者性』」永野文香訳，以文社.

_____．2013.「犬と人が出会うとき―異種協働のポリティクス」高橋さきの訳，青土社.

瀬戸裕之・河野泰之編.『東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略―避難民・女性・少数民族・投降者からの視点』明石書店，2020 年，328 p.

渡辺彩加 *

本書は，長期にわたり種々の戦争が継続した東南アジア大陸部において，犠牲者としてみられがちな地域住民を避難民，女性，少数民族，投降者に分け，戦中・戦後の社会変化に彼ら彼女らがどのような主体的な対応，すなわち，生存戦略をとってきたのかについて，公的な文書に記録されない人びとの語りを書き起こすオーラル・ヒストリーの手法をもとに考察し，戦争の勝利者からみた戦後史とは異なる被戦争社会の実相を描いた本である．ベトナム，ラオス，カンボジア，タイ，ミャンマーの 5 つの国と地域を，国や地域別の編成をとらず，また，歴史学，政治学，経済学，社会学，文化人類学など多様な分野の専門家が，幅広い調査対象者にアプローチをかけた意欲的な本である．

本書は序論とおわりにを除く 3 部 7 章から構成されている．以下，本書の内容を概観する．

まず序論では，本書の本題意識を明らかにしながら，前述した東南アジア大陸部の戦争と地域住民の生存戦略といった 2 つのキーワードに着目するべき意義を述べている．著者らは，先行研究の課題として，本書の主題である「東南アジア大陸部の戦争」と「地域

* 京都大学大学院総合生存学館

住民の生存戦略」を見落としているのではないかと指摘している．これらをより噛み砕いて説明するならば，前者は東南アジア大陸部が断続的に長期間にわたって行なわれた戦争，複数の要素が重層的に関係した戦争，国家や国境を超えた空間的広がりをもつ戦争の3つの視点，また，後者に関しては，戦争を経験した生活者の視点，戦中・戦後の社会変化の連続性に注目する2つの視点である．これらの視点は，混迷する東南アジアのこれまでとこれからを見つめ直すために，今拾い上げるべき観点であると本書では述べられている．特に，東南アジア大陸部の戦争に関して先行研究が提示している「『自由主義陣営を守る戦争』，あるいは『民族の独立・統一を達成する戦争』という見方」（p. 26）だけではなく，戦争に巻き込まれた国や地域においていかにして地域住民が戦略的に生き延び，暮らし，関わってきたのかも含め考察すべきだと指摘している．

第1部では，北部ベトナム，東北タイを事例に「国家政策からの選択的逸脱が生存戦略となった事例」を明らかにしている．第1章で岩井美佐紀は，ベトナム戦時中の北部ベトナムに着目し，徴兵により男性が不在の中で女性たちが全面戦争に巻き込まれていく様を記述している．女性たちは軍事支援，合作社での集団労働，子どもや高齢者といった家族のケアの役割を担っていた．十分なケアや生存保障が合作社から受けられない中で，女性たちは合作社の集団労働をサボタージュし，闇商売などで働く逸脱行動を行ない，家族へのケアを維持しようとした．逸脱行為を行なっている女性たちを合作社は罰することはなく，見逃していた．また，女性たちは，女性ならではの気遣いと配慮で遺族へのケアを実施し，地域のネットワークや信頼関係を増加させ，地域のレジリエンスを高めることに貢献した．国家政策に対して，従うものと従わないものを主体的に選択し，家族のケアを実現するための生存戦略をとっていたことが示されている．第2章で倉島孝行は東北タイでの内戦が農民たちの半生にどのような影響や痕跡を与えたのかに注目し，元タイ国共産党の拠点の跡地の行政村に暮らす4人に対してインタビューを実施している．4人は異なる経歴，異なる政治的立場であるにもかかわらず，内戦の影響を大きく受けていた．元タイ国共産党拠点であることを逆手にとり，多額の予算や開発支援を獲得したり，元タイ国共産党を，国家の行政を補完する「森林保護自衛団」として組織することで，国軍との関係を構築したりした．

第2部では，生業転換が生存戦略となった事例をラオス中部，カンボジア・シェムリアップ市，タイ北部のケースをもとに彼ら彼女らの存在や生活史から照射している．第3章で瀬戸裕之はラオスの内戦で避難民となった人びとの主体的な生存戦略に着目している．彼らは戦時中は避難を余儀なくされていたが，戦後，移住先で土地を取得，開墾し耕作地を広げた．それがこの時期の森林の伐採と減少に大きく関係した．また，避難民が増えコミュニティが形成された集落は，ヴィエンチャン県内有数の商業地区へと発展した．海外に行った親族とのネットワークを活

用し，需要の変化を知り，織物販売からゴム生産へと生業を変化させたことから，戦争避難民が主体的に社会を変容させたのではないかと瀬戸は考察している．第 4 章で佐藤奈穂はカンボジアのポル・ポト時代の内戦期と戦後の地域復興について，女性に着目し考察している．内戦によって夫を亡くした女性たちが，商業分野へ進出し，互いに協力しあい，生計を維持していくための収入の確保を実現した．戦争未亡人の存在は大きな社会問題であった一方，行動範囲が拡大した女性たちが商業活動を行なうことにより，内戦後のカンボジアの復興を支えてきた側面が示された．第 5 章で片岡樹はタイ北部山地に着目し，冷戦期における山地の住民たちが，地域の戦乱の加害者の側面をもちながらも山茶の栽培に従事し，地域の人口構成と生業の変化に積極的に関わる存在であったことを示している．山茶がプル要因となり，さらに山茶を商品化することにより，さまざまな少数民族を呼び寄せ，地域の人口構成の変化を生んだ．これらは，例外的な事例ではなく，タイの他の山地にも見出される可能性を示唆している．

第 3 部では，宗教活動によって可能となった生存戦略をミャンマー北部，ベトナム南部から浮き彫りにしている．第 6 章で小島敬裕は現在まで戦争が継続している地域であるミャンマー・中国国境地域の山地民タアーンに着目し，国境と宗教を用いた生存戦略を明らかにした．少数民族武装集団への徴兵を逃れるために，中国へ出稼ぎに行ったり，都市部の寺院にて出家者として生活をしたりする姿が示された．国境を超えた移動や都市への移住が避難のための手段となっており，とりわけ宗教実践が紛争地域の住民にとって重要な生存戦略として存在したことを明らかにした．第 7 章で大野美紀子はベトナムを事例に，宗教が戦後に果たした役割について示している．本章では 1975 年以降，政治的・社会的にマージナルな存在であったカトリック信徒に焦点を当てている．ベトナム南部では宗教が戦争下での生存戦略に寄与した役割は小さく，異なる宗教の信者たちの間でも戦争下で協力しながら避難していた．しかし，戦後，生存から生活へと変化を遂げていった際には，宗教によるアイデンティティーの回復が元避難民にとって戦後社会への復帰をもたらした事例を挙げている．

おわりにでは，各章の内容を総括し，序論で示した大きな問題意識と本書の意義を改めて述べるとともに，「今日の東南アジア大陸部の特質として，どのような点を指摘できるのか」（p. 299）について述べている．第一に，「戦争を契機とする分断を内包する社会」（p. 300）であり，敗者か勝者かなどの二項対立ではなく，空間的及び社会的な分断がこの地域で生じていたことを指摘している．第二に，水平的な共同関係と垂直的な協働関係の両方が生じている「戦争を契機とする協働を内包する社会」（p. 300）であると指摘している．最後に，「戦争を契機として地域住民が生み出した生業の展開と社会関係が構築されつつある」（p. 302）と言及し，被戦争社会下での新たな視点と仮説を提示し，論を閉じている．

本書の重要な意義は，今までの先行研究では焦点が当てられてこなかった人びとのオーラル・ヒストリーに着目し，その生存戦略を示している点である．被災者，被害者，加害者という分かりやすいカテゴリーに収まる人だけではなく，取り残された家族や加害者でもあり被害者でもある存在をまず明らかにし，彼ら彼女らがとった生存戦略を明らかにしている．第1章で岩井が述べているような「聞かなければ話されない話」（p. 57）のさまざまな事例が収集されている．こうした広範な事例をもとに，現代の東南アジア大陸部が「戦中・戦後に戦争避難民，女性，少数民族，投降者などの地域住民が，自らの生存戦略を模索することによって，生業や社会関係をダイナミックに変化させている地域」（p. 304）というこれまで提示されてこなかった視点をもたらした学術的貢献は非常に大きい．

一方で，挑戦的に扱ったオーラル・ヒストリーに関して，手法上の課題は残されていると考えられる．具体的にいえば，数人のオーラル・ヒストリーだけを追って，話されていることが事実かどうかの確認をとるのは困難である．特に，ひとりに対してのみ行なう調査において，その人の都合がいいように解釈されている場合が多く存在すると考えられる．東南アジアに当てはめて考えてみれば，これまで多くの国では，現地調査に関する規制が厳しかったため，戦争に関して地域住民にインタビュー調査を行なうことは困難を極めていた．しかし，近年，部分的ではあるが，かつて戦争に何らかの形で加担していた地域住民に対するインタビューが認められ，彼ら彼女らの体験や声，想いを記録することが可能となった．一方で，戦争を実際に体験した人びとは高齢化しており，今ここで記録を怠ってしまえば，貴重な情報が失われてしまう可能性が高い．平均寿命が比較的短い東南アジア地域においてはなおのこと，オーラル・ヒストリーを成立させるために必要な情報提供者のアカウンタビリティが困難になってしまっている．今後，事実誤認を確認するとともに，照射するべき範囲を広げるためにも，ある声と別の声の隙間に埋まってしまっている人びとや時代へのさらなる調査の充実を期待したい．

ここまで本稿では，新刊本の内容と批判的な検討を行なってきた．本稿の後半で検討したように本書は課題もあるが，これらは本書の価値を決して損ねるものではない．本書は東南アジアで行なわれていたさまざまな生存戦略を挑戦的に明らかにしているので，ぜひ一度手にとって読んでほしい一冊である．

杉島敬志編．『コミュニケーション的存在論の人類学』臨川書店，2019年，360 p.

木村大治 *

本書は，近年の人類学において注目を集める「存在論的転回」について，編者・杉島氏が提唱している「複ゲーム状況」論の視点から論じようとするものである．前著『複ゲー

* 京都大学名誉教授

ム状況の人類学』［杉島編 2014］からの連続した議論と考えられるので，本書評では「複ゲーム状況」に関しても紙幅を割かせていただくことにしたい．

まず，本書における「存在論」，「コミュニケーション」，そして「複ゲーム状況」の関係について述べておく．杉島氏は序論において，存在論的転回には「革命的といえる刷新はなかった」（p. 10）と総括した後，やや唐突に「やはり欠けている規則論」という形で，規則とコミュニケーションに関する議論を持ち出す．その理由は，存在を存在たらしめるのは結局のところコミュニケーションだ，ということなのだが，存在論的転回における「存在」をそのような形で解消できるのかという点については，私自身勉強不足なので，論評は留保したい．さて，杉島氏のいうコミュニケーションとは社会の中の「ゲーム」を成立させるものであり，ここで「複ゲーム状況」の概念が登場する．

「複ゲーム状況」とは，「整合せず，両立しえない『規則―信念』が併存しながら，同時並行的に作用する状態」と定義される［杉島編 2014: 10］．たしかに人類学者はフィールドで，そのような事例を見聞きすることがしばしばある．「優秀な呪医だと言われている人が，病気になるとさっさと近代的な病院に行ってしまった」などといったような形である．そのような事態をこの概念によって明確に画定することができるようになったわけであり，私自身，これまで強い関心をもってこの議論の行方を見つめてきた．

その一方で，「ゲーム」（この語はウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」に由来する）や「コミュニケーション」という概念について，もう少し踏み込んで考察してほしい，という思いも抱き続けてきた．これらはそもそも明確な定義が困難な概念なのだが，それだけに何にでも適用できてしまい，かえってその効力が薄くなってしまいかねないからである．以下，この点についての私の若干の提案と，それに沿った本書の各論文の紹介を記しておきたい．

まず考察の補助線として，「ゲーム」を「ルール」と「プレイ」の 2 つに分けて考えてみることにしよう．サッカーとか将棋とかいったゲームらしいゲームにおいては，このような区分けが可能である．サッカーには「手でボールを触れるのは反則である」とか「ボール全体がゴールラインを越えると得点になる」といったルールがある．それらは明確で矛盾を含まず，またもちろん有限である．一方，ルールに則っておこなわれるプレイはどうだろうか．プレイの全体を「これこれのもの」と明確に定義することはできず，またしばしば論評として「アイデア」とか「創造性」といった言葉が使われることからわかるように，いままでなかった新しいプレイが出てくる可能性が常に否定できない（この点については，以前，木村［2018: 120–121］で論じたことがある）．また，プレイはさまざまな水準が同居することができる．サッカーでは，一対一の球の奪い合いというプレイもあるし，どのようにプレスをかけるかとか，後半にどの選手を投入するかといった大局的な戦略もまたプレイと呼びうるので

ある．

このように考えると，「複ゲーム状況」とは実は「複プレイ状況」のことなのではないかと思われてくるのである．矛盾を含まない一枚岩の体系であるはずの「ルール」（杉島氏の言葉では「規則―信念」）が，整合せず両立しないまま併存しているというのはやはり変である．そういう奇妙な状況こそが，杉島氏が「複ゲーム状況」と呼んだものだったのだが，そこには西欧近代的な「ルール至上主義」とでもいうべきバイアスがかかっており，「複プレイ状況」と「複ルール状況」の取り違えが起こっているのではないだろうか．「複プレイ状況」と捉えてみれば，フィールドの人々が規範について語るときでさえしばしば示す，ある種の遊戯的な態度も納得されるのである．

しかし，以上の論考はすぐに次のような反論にさらされるだろう．現実の社会的出来事においては，何がルールで何がプレイかは判然と分かちがたい．ルールからプレイが生成すると同時に，プレイからルールが生成するというプロセスもまた起こっている（フットボールの試合中に生徒がボールを手で持って走り出したのがラグビーの起源だといったように）．フィールドで見るべきは，まさにそのような，ルールとプレイが渾然一体となって変化していくさまなのだ，と．たしかにそれはそのとおりである．ウィトゲンシュタイン自身にしても，「言語ゲーム」の議論の中ではルールとプレイを区別して論じるということはしてない．また，ルールだと捉えられていたものをプレイの水準に落とし込もうとしたとき，ではそのプレイを律するルールとはいったい何なのか，という点も難しい問題になってくる．しかしそれにもかかわらず，ルールとプレイの分割という補助線は，一定の有効性をもっていると私は考えている．

それでは，上記の議論を絡めつつ，本書の各章で実際のフィールドでの出来事はどのように分析されているのかを見ていくことにしよう．

第一章・片岡樹氏「何をしたら宗教を『真剣にとりあげた』ことになるのか？」では，タイ北部における宗教混交が，複ゲーム状況の概念を用いて分析されている．そこには「文化をごっこ遊びとしてとらえる」(p. 58)，「キリスト教の神であれ，（…）存在を成り立たせているのは，閉じた論理のなかで神や霊の存在をあらかじめ証明してしまうようなゲームのルール（…）であることがわかる」(p. 70）といった記述があり，「複プレイ状況」におけるルールとは何かという問題を考えるうえで重要なヒントが示されている．

第二章・津村文彦氏「開放系コミュニケーション」は，タイにおける「ピットカブーン」と総称される病についての分析である．ピットカブーンとは何であるか，という輪郭は容易に定まらないのだが，津村氏はその状況を「開放系コミュニケーション」という名で呼んでいる．それは，「ピットカブーンに言及する」という最小限のルールのもとに，さまざまな症状や出来事をめぐって展開するプレイの総体といえるだろうか．

第三章・杉島敬志氏「コミュニケーションをめぐる様相変化」では，インドネシア，フ

ローレス島における妖術や首長をめぐるコミュニケーションの歴史的変化の分析を通じて，存在論的人類学に欠けているコミュニケーション的文脈が探究されている．

本書ではこのあたりから，議論の重心がエージェンシーと存在論に移ってくる．実は本書のもとになった民博の研究会は「エージェンシーの定立と作用―コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」と題されていた．エージェンシーの語は本書の表題には現れてないものの，コミュニケーションおよび存在論に強く関係する概念であることはいうまでもない．また，エージェントとは自ら動くものであるわけだが，それはプレイの概念にもつながってくるだろう．

第四章・里見龍樹氏「育つ岩」では，ソロモン諸島のマライタ島の住民がもつ，「深海で岩が生きもののように育っている」という観念をめぐる考察がなされている．存在論における「存在」には，触れられるもの，捉えられるものという含みがあるが，この岩のように決して手の届かない彼方にある存在を考えることは，存在論自身を再考する契機になりうるだろう．

第五章・中村潔氏「起源の場所」は，バリにおいて土地そのものが主体的なエージェンシーをもっており，「人を土地が持つ」といった表現が自然に使われているという現象の分析である．そして第六章・馬場淳氏「書類の／とエージェンシー」では，パプアニューギニアにおいて，書類そのものがさまざまな形で人々に対する強いエージェンシーをもっているという事例が記述されている．ともに，杉島氏のいう「エージェンシーとコミュニケーションの等根源性」（p. 234）について考えるうえで重要な事例である．

第七章・高田明氏「社会化をうながす複合的文脈」では，南部アフリカのサンにおける養育者と子どもの相互行為が詳細に分析されている．他の論文では「コミュニケーション」という言葉の内実があまり語られてないという点に若干のフラストレーションを感じていたが，ここではそれが目に見える形で提示されている．

第八章・飯田卓氏「技術習得と知識共有」は，マダガスカルの漁撈民ヴェズの身体知とコミュニケーションをめぐる分析である．知識やコミュニケーションといった，形をもたないかのように思われる存在が，実は身体やモノと不可分な関係にあることが説得的に描かれている．

以上のように各論文では，複ゲーム状況，存在論，コミュニケーション，エージェンシーといった概念を縦横に用いた議論が展開されている．しかし最初に触れたように，これらの概念の適用範囲が広すぎることで，かえってその有効性が失われるといったことにもなりかねない．そこで私は「ゲーム」に関して，「ルール」と「プレイ」に分けてみては，という提案をしたのだった．その方向でゆくと，コミュニケーションやエージェンシーは，このうちの「プレイ」の次元に属する事柄ではないか，とも思われてくる．本書はそのような問題も含め，今後さまざまな展開が期待できる論点を含んだ一冊であり，ぜひ一読をお勧めしたい．

引　用　文　献

杉島敬志編．2014.『複ゲーム状況の人類学―東南アジアにおける構想と実践』風響社.

木村大治．2018.『見知らぬものと出会う―ファースト・コンタクトの相互行為論』東京大学出版会.

蛯原一平・齋藤暖生・生方史数編.『森林と文化―森とともに生きる民俗知のゆくえ』（森林科学シリーズ 12）共立出版，2019 年，288 p.

大石高典 *

本書は，高校生，学部学生から専門教育への導入レベルまでを射程に入れた教科書『森林科学シリーズ』の一巻として編まれている．やや型破りにも，執筆陣のほとんどが文化人類学と環境社会学の研究者で占められている．分野を超えて森林と人間の関係について考える挑戦的な教科書の刊行は，自然科学的な視点から森林に関心をもつことが多いであろう農学系の学生や若手研究者に，より複眼的に森林について見つめ直すきっかけを作ったというだけでも意義があると思われる．

内容を見ていこう．全体の導入である第 1 章（蛯原一平・齋藤暖生・生方史数「森とともに生きる人々の文化と民俗知」）は，森林文化を「地域の人々が世代を超え培ってきた，森林をめぐる多岐にわたる知識やそれらを利用する技術・技能，さらには森への畏怖や世界観，そして行動実践の総体」（p. 2）と定義づける．そのうえで本書を通じた鍵概念，「民俗知」への導入が「科学知」と比較しながらなされる．高度に形式化され普遍化が志向される科学知に比べて，土着的に形成される民俗知は記号化による表象は困難だが，暗黙知のように「共通体験を通して感覚的に伝えることが可能な知識」（p. 5）を含む点に特徴がある．民俗知は科学知を補い，持続的な資源管理にも役立つが，科学知に対し従属的な立場に置かれがちである．このことは，森林に関わる地域住民の周辺化と関わっている．民俗知をより適正に評価したうえで，資源管理や保全の制度に組み込むことが社会的公正に適うことであり，そのための課題を整理することが本書の目的のひとつとして提示される．

第 1 部「民俗知を知る：熱帯と冷帯に暮らす森の民の事例から」では，アフリカ（第 2 章），東南アジア島嶼部（第 3 章，第 4 章），北アメリカ（第 5 章）と地域をまたいで事例研究が集められている．

第 2 章「民俗知と科学知：カメルーンの狩猟採集民バカの民俗知はどのように語られてきたか」（服部志帆）では，エスノサイエンスの研究史が概説された後，バカの植物知識が第 3 章に登場するプナンとの比較を交えて描き出される．熱帯林に暮らす狩猟採集民でも，バカとプナンで民俗知の特徴はだいぶ異なる．バカの植物知識で数が多いのは薬用利用だが個人差が大きい．服部は，そこに個人の病歴や試行錯誤が凝縮されているとみる．バカの民俗知は，絶えず構築・更新される「なまもの」である．近年，開発と自然保護の板挟みでバカの生活変容は著しい．先住民運動の文脈で民俗知が政治化される状況や

* 東京外国語大学

非木材生産物の商品化に向けた協働の可能性について触れられる．

第 3 章「森林環境問題と住民の森林観：なぜプナンは森林を守るのか」（小泉都）は，激しい開発にさらされ森林へのアクセスを奪われてきたプナンの対応に焦点を当てる．開発には，政府，企業，地域住民の利害が錯綜した政治力学が絡み合う．プナンの応答は多様だが，NGO からの支援を得て森林を守り抜いた集団がいる．彼らが森林伐採に反対する理由は，森林から得られる食料や現金収入のためだけではない．「プナンの生き方は森林への信頼に根差して」（p. 75）おり，実存に関わる動機付けがある．抵抗が機能した要因として近隣の農耕民との民族間関係の重要性が指摘される．

異なる価値観がぶつかり合う熱帯林について，多様な利害関係者が管理の意志決定に加わる「協働管理」の仕組みが模索されている．第 4 章「熱帯林ガバナンスの「進展」と民俗知」（笹岡正俊）は，インドネシアにおける取り組みを検証する．国立公園近傍に暮らすセラム島山地民は，超自然的存在による監視という独自の方法で「クスクスを捕り，猟場を自ら管理」（p. 102）してきたが，公園管理計画の決定過程から排除されているために猟を継続できる見込みは立っていない．協働管理の理念が制度設計に落とし込まれても，実際の運用に住民が参加できなければ，民俗知がすくい上げられる余地はない．では，研究者に何ができるか？笹岡は，民俗知の中でも深い地域理解を要する暗黙知の領域について，全体性を損なわずに丹念に拾い上げ「表に出すこと」だという．

第 5 章「近代化と知識変容：カナダ先住民の「知識」をめぐる議論と実践」（山口未花子）では，北方針葉樹林に暮らすカスカの民俗知が，外部社会との関わりの中でどう変化してきたのかに焦点を当てる．カスカがブッシュと呼ぶ森についての知識は全体性をもち，具体的空間に宿る超越的なものを含む．狩猟活動は，動物や動物の霊と信頼関係を築くことで成立する．しかし，定住化政策や過去に行なわれた同化政策のため，現在では民俗知の担い手は高齢者に限られる．自治政府は知識伝承のための機会を作っているが，若者の参加は積極的とはいえない．山口は，古老から受け継いだ伝統的知識を継承する担い手になろうとしている．

第 2 部「民俗知をつなぐ：国内山村の事例から」では現代日本の山村における森林利用と民俗知が扱われる．

山村の森林利用は古くから市場経済に組み込まれてきた．第 6 章「和紙原料栽培の民俗知から見る新たな森林像」（田中求）では，高知県山間部における和紙原料（コウゾとミツマタ）の栽培・加工の歴史と民俗知が紹介される．和紙原料は他の作物と混作することで生育に相乗効果が得られる．ミツマタは，かつて焼畑で食用作物と一緒に栽培されていた．手間がかかる収穫と加工は，地域社会の楽しみでもあった．民俗知と地域社会の相互扶助のつながりに支えられた和紙原料栽培は，まさに森林農業（アグロフォレストリー）というべきものだったことが分かる．しかし，その営みは和紙の需要減やコウゾの輸入自由化などにより衰退しつ

つある．

第7章「山を知る：森とともに生きるマタギたちの民俗知」（蛯原一平）は，「山」を知悉する猟師の民俗知を「生き方」として把握する．猟師たちは，山の地形や景観について自らの経験に基づく極めて具体的な知識（記憶知識）を蓄積し，仲間と共有することで猟を成り立たせている．春熊猟に関する事例記述は，著者自身が長期の参与観察を重ねる中で，記憶知識を身に付けてきた過程を彷彿とさせる民族誌になっている．

第8章「ありふれた資源をめぐる民俗知：山菜・キノコをめぐる民俗知とその現代的意義」（齋藤暖生）は，岩手県の山村を事例に採集・利用過程における民俗知を紹介する．山菜・キノコ利用は，生活に必須ではないが代え難い楽しみをもたらす．採集対象の発生には気候など予測不可能な要素が多く，確実に収穫するには生息地や時期について個別で具体的な生態知が求められる．採集には生態知に加えて社会知も重要である．調査地で山菜・キノコは自由にアクセスできる資源だが，それ故に採集者による自制の規範が生まれる．希少性はないが強く嗜好される山菜・キノコは，「ごちそう」として地域で分かち合われてきた．齋藤は，山菜・キノコ利用文化を観光や特産化に活かす取り組みに関わり，在来知を活かした地域振興の可能性をともに探っている．

国内でも国立公園や世界遺産といった保護地域制度を活用した地域振興が盛んに行なわれてきた．第9章「保護地域を活用した地域振興や山村文化保全の可能性」（柴崎茂光）では，エコツーリズム，日本遺産，文化財保護法改正を事例に保護地域制度の適用と帰結が検討される．保護地域に指定されると，保護されるべき「主要な価値」ばかり追及することで「価値の単純化」が起こりやすくなる．観光化のため外部者に価値を分かりやすくすることが求められるが，これも価値の切り捨てを促進する．補助金に代表される外部からの半強制的なインセンティブによる保護地域指定の取り組みは，結果的に民俗知の消失につながりかねない．

最後の第10章「民俗知のゆくえと現代社会」（齋藤暖生・蛯原一平・生方史数）では，本書全体の結論が述べられる．人と森林を結び付ける役割を果たしている民俗知は，「身体に内在する知」であり，人々の生活や置かれた状況とともに常に変化し続ける．民俗知は，科学知と交流・補完し合うことで，資源管理，環境保全，地域振興に貢献することが期待されるようになってきているが，民俗知の安易な活用にはその全体性を考慮しない「切り取り」や「価値の単純化」の罠が潜む．これらのリスクを減らすためには，地域と外部社会との間で民俗知を適正かつ柔軟に媒介し「翻訳」する存在が重要となる．

以上が本書の概要である．ここからは評者の若干のコメントを付す．

まず，森林と人間の関係を考える切り口として，民俗知という具体的な分析枠組みを設定し，国内と海外の事例をあえて同じ地平に置いて議論を試みた点を評価したい．グローバルな動きとローカルな生活世界のリアリティの両方を視野に入れながら，森林と人間

の関係を学ぶことができるようになっている．通読すれば，開発・自然保護や過疎化といった社会課題に直面する森林地域の住民が抱える葛藤が重なり合いながら浮かび上がってくる．このことは，外部からの影響を受けつつも，それぞれの地域社会の中で「森林とともに生きること」と深く結び付いた内在的な論理・仕組みであったはずの民俗知が，国家・ドミナント社会・企業・NGO などの外部アクターとの交渉の中で政治化される場面が増えていることにも現れている．

それ故に，評者には本書の最後に言及されている民俗知の「翻訳」が，矛盾をはらんだ困難な仕事に思える．編者のひとりである蛯原をはじめ，現地に長期間住み込みながら研究を続けるレジデント研究者が複数執筆陣に加わっていることが本書の特徴であり，地域社会や知識の担い手とともに研究・実践する方向性が強く打ち出されていることはよく分かる．しかし民俗知とは，身をもって識るものではあっても，翻訳可能なものなのだろうか．本書の中で繰り返し示されているように，一見とらえどころのない，不定形なところが民俗知の良さであり特徴である．エスノサイエンスの記述・分析と，地域社会のサバイバルに関わる知識の翻訳（権利擁護や代弁）とでは目的も意味も異なる．「民俗知を可能な限りで形式知に変換してから，他者に伝える」（p. 278）ことが媒介・翻訳なのだとすると，翻訳者は，柔軟で可塑性のある民俗知が形式に馴染まないことを了解したうえで，民俗知が形式知に絡め取られ固定化されてしまわないような「翻訳」のあり方を試行錯誤するという困難を強いられることになる．「複数のアイデンティティや立場を有する人材」（p. 279）であるほど，その苦悩は深くなるのではないだろうか．

それでもあえて翻訳という言葉を使うのならば，評者は民俗知と科学知の二項対立を前提とする「知の変換」よりも，本来の翻訳仕事に含まれる異種混交による創造や遊びの創出過程に着目したい．現代のレジデント研究者には，必要に応じて外部社会を巻き込み，民俗知／科学知を問わず活用しながら新たな知識を地域の人々と「ともに」創造していく，コンヴィヴィアルな営みこそが求められているように思うからである．

間永次郎．『ガーンディーの性とナショナリズム―「真理の実験」としての独立運動』東京大学出版会，2019 年，390 p.

藤倉達郎 *

非暴力主義によってインド独立運動を率い，マハートマー〔偉大なる魂〕と呼ばれたガーンディーは，インドとパーキスターンの分離独立を目前に控えた政治的大混乱の時期に，自らが出版していた週刊誌に「ブラフマチャリヤ」（性欲統制）に関する記事を連載する．5 回シリーズで掲載されたその記事は，インドの人々に「生殖器官の統制」を行ない，「真のブラフマチャーリー」（性欲統制者）になることによって「独立（スワラージャー）の全ての任務」を完了するように説いた（pp. 3–4）．ま

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

た，晩年のガーンディーは，ブラフマチャリヤの実験の一貫として，側近の女性たちと裸で寝床をともにしている（第 6 章）．

ブラフマチャリヤは，ガーンディーの生涯を通じて，サッティヤ（真理）やアヒンサー（非暴力）などと不可分のものとして深められていった重要な主題である．しかし，ガーンディーのブラフマチャリヤを中心に据えた研究はこれまで少なかった．その理由として著者の間永次郎氏はまず，ガーンディーのブラフマチャリヤやセクシャリティの問題が，「国民の父」「偉大なる魂」あるいは世俗的欲望の放棄者というイメージにそぐわないものとして，インド国内で長年タブー視されてきたことを挙げる（pp. 6–7）．さらに，ポスト啓蒙時代の実証主義的な社会科学によっては，ガーンディーの運動の道徳的・宗教的側面を正面からとらえることが難しい，ということもある（pp. 7–8）．これと対照的に，E.H. エリクソンを代表とする新フロイト派は，ガーンディーの精神史の一環としてブラフマチャリヤに注目してきた．しかし，それらの研究では，エディプス・コンプレックスなどの既存の理論をただあてはめて，想定内の議論が展開されるにとどまっている．また，社会的・政治的側面は捨象されている（pp. 8–9）．

2000 年になると，ブラフマチャリヤを主題とする 2 つの学術書が公刊される．ひとつは文化人類学者によるもので，もうひとつは歴史学者によるものである．前者はフーコーの権力論を援用しながら，独立運動の非暴力闘争とブラフマチャリヤが，身体において決定的に結びついていると論じ［Alter 2000］（p. 10），後者は，ガーンディーの実験を，セックスを放棄することにより，セクシャリティを十全に受容する試みだという解釈を示した［Lal 2000］（p. 12）．著者はこれらの先行研究に一定の価値を認めつつも，それらが，既存のフーコー的な枠組みに依存することや，過度な解釈学的アプローチによって，「ガーンディー自身の言葉からあまりに離れてしまっている」（p. 13）と論じる．

これらに対して，著者はブラフマチャリヤの実験の意味を，ガーンディー自身の言葉にもとづいて内在的に理解することを目指した．ガーンディーは，グジャラーティー語，ヒンディー語，英語の 3 つの言語を自在に用いた．著者は，ガーンディーが生涯を通じて著した，これら 3 つの言語による大量の原語テクストを通時的・網羅的に精読するという作業を行なった．その成果である本書は，ガーンディーのブラフマチャリヤの思想とその発展過程を，彼の政治運動との絡み合いの中で理解するための，画期的な研究書である．

本書は序章，終章に加えて，各 3 章からなる 2 部構成になっており，第 1 部ではガーンディーの南アフリカ滞在期が，第 2 部ではインド帰国から暗殺されるまでの時期が扱われる．「精液結集の秘術」と題された第 1 章は，「非暴力的抵抗」の異名で知られるガーンディーの「サッティヤーグラハ」（真実堅持）闘争の南アフリカにおける誕生に焦点をあて，まず，それが単なる政治的戦略の選択ではなく，ガーンディーの宗教的経験に

根ざしていることを明らかにする．さらに政治的戦略に還元不能な「神の誓い」でもあるサッティヤーグラハが，いかにアートマン（自己，魂）の力を必要としており，それがアートマンの浄化のためのブラフマチャリヤと結びつくかが論じられる．ここで重要であったのが生命力や活力の源泉である「精液」を体内に蓄積することであり，その放出を引き起こす「性欲」を克服することである．しかし，性欲克服のための具体的な解決法は見出されていない．

第 2 章では，ガーンディーの初期の著作『ヒンド・スワラージ』に書かれたサッティヤーグラハが，ラージチャンドラ，トルストイ，ヴィヴェーカナンダという 3 人の同時代人から，どのような影響を受けているかを分析する．ラージチャンドラはガーンディーと同郷でヒンドゥー教の深い学識をもっていた．ガーンディーは彼から，サッティヤーグラハの基盤となる慈悲・アートマン・真理といった概念を学んでいく．トルストイは「ラディカルな意味での内的（＝個人の）完成と外的（＝世俗世界の）完成の一致」を説き，それが成就された状態を「神の国」と呼んだ（p. 93）．ガーンディーは南アフリカ時代にトルストイの多くの著作を読み，トルストイの「愛＝神的自己＝世界の一致」（p. 94）という思想は，サッティヤーグラハの思想形成に大きな影響を与えた．ヴィヴェーカナンダの著作『ラージャ・ヨーガ』はインド国内外で広く読まれ，「近代ヨーガ」の普及に大きな影響力をもったとされ，ガーンディーも彼の著作を読んだ．サッティヤーグラハを行なう者は身体を鍛え精液結集をすることが不可欠である，というガーンディーの叙述に，ヴィヴェーカナンダの著作の影響が読みとれると著者は論じる．

第 3 章では南アフリカの郊外にガーンディーが設立した「トルストイ農園」でのブラフマチャリヤにまつわる 2 つの実験が検討される．ガーンディーはこの農場でユダヤ系ドイツ人のヘルマン・カレンバッハと同居生活を送っており，2 人の間にはホモエロティックな関係があったことが示唆される．この 2 人の間で行なわれた 2 つの実験とは乳汁の放棄と蛇に対するアヒンサー（不殺生）をめぐるものであり，これらの背後にはガーンディー自身の身体に内在する性欲や恐れについての意識があったが，それらへの対処は消極的な禁欲主義に特徴づけられていた，と著者は論じる．

第 4 章では 1915 年のガーンディーのインド帰国から，その 7 年後にガーンディーが自らの率いた最初の独立運動が終焉するまでの時期が扱われる．ガーンディーが呼びかけた「非暴力非協力運動」は全インド・レベルに広がり，彼は独立運動の実質的な最高指導者になる．しかし，1922 年にチャウリー・チョウラーという僻地の村で起きた農民暴動事件を機に，ガーンディーは闘争運動の一斉停止を指示する．軌道に乗り始めていた反英闘争を停止する判断についての合理的説明はいまだになされていない，と著者は述べる．そしてそれを理解するためには，運動の展開と，ガーンディー自身が自らの精液結集に見出していた困難を関連づけて分析する

ことが必要だと論じる．そしてそこには男性主義的・抑圧的なブラフマチャリヤ思想の限界が関わっていることを示唆する．第5章では1922年から1924年にかけてガーンディーが獄中で読んだタントラ（ヒンドゥー教の密教的な儀礼・哲学）についての研究書が，出獄後の行動にいかに関わっているかが論じられる．獄中の読書を通して，ガーンディーはたとえば「女性との交流の中で，性欲から自由になった者」について語りはじめる（p. 223）．出獄後にガーンディーが率いた「塩の行進」には，それまでの反英闘争と異なり，多くの女性が参加する．このように出獄後のガーンディーのブラフマチャリヤの定義は，従来の男性主義的・抑圧的なものから，タントラ的な女性原理と密接に関わるものへと変化していく．

第2部の最終章である第6章においては，塩の行進以後，ガーンディーの暗殺までの時期が扱われる．独立が近づくにつれて，インド国内のさまざまな分断が明らかになる．その中でガーンディーは不可触民制廃止を訴えて繰り返し「死に至る断食」を決行するが，その際，断食は政治的目的を越えた「神の意思」に従って行なわれなければいけない，と繰り返し述べる（p. 270）．そして1933年の21日間の断食開始直前には，神の声を聞くという神秘体験をし，ますます社会的・政治的問題と，個人のアートマン（魂）の浄化や神との出会いという宗教的主題を結びつけて語るようになる（pp. 271–273）．1930年代後半以降のヒンドゥーとムスリムの宗教間対立の高まりを，ガーンディーは自らのブラフマチャリヤの完成によって解決しようとする．1944年8月に死者5,000人を出したカルカッタ大暴動が起こると，ガーンディーは宗教融和を呼びかける裸足の行脚とともに，自らの血縁者である19歳の女性マヌとの裸の同衾というブラフマチャリヤの実験（それを彼は「大供儀（マハーヤッギャ）」と呼んだ）を開始する．この供儀を通してガーンディーはマヌの「母」となることを目指し，この供儀によって発生するエネルギーによって「実体的に」宗教間暴動をおさめようとしていたことが示される（pp. 291–292）．終章において，著者は，ガーンディーがインド独立後にも「スワラージ」（独立，自己統治）について語りつづけたことを指摘し，彼の「個人（*vyakti*）と集団（*samaṣtī*）の間には，ひとりの浄化が大勢の人々の浄化と相同的であるという密接な関係がある」という言葉を引用する（p. 348）．そして，ガーンディーの思想がインド国外のキング牧師，ネルソン・マンデラ，アウンサンスーチーやダライ・ラマ14世に，たんなる政治戦略や普遍宗教論ではなく，「良心の声」や「真理の探究」の思想として引き継がれていると述べる．それによって著者は，ガーンディーの取り組んだ課題が，いまだに／つねに「未完の課題」として私たちに残されていると示唆しているように，評者には思える．

本書はこれらの他に，ガーンディーの「世俗主義」のとらえ方や，自己統治と「バクティ」（最高神への絶対的帰依）の関係等々についても，示唆に富む論述を行なっているが，ここでは紙幅の都合上，触れることがで

きない．

しかし，この本を読んでいてほんの少し気になった 2 点について書いておきたい．ひとつ目は，とても細かい言葉遣いに関わる．第 1 章で，ガーンディーにとってのサッティヤーグラハの意味を説明する際，著者は，「その意味が完全なものとなるためには，近代西洋の受動的抵抗には含まれえない誓いをめぐる超越的かつ内在的な宗教的意味が付与される必要があった…」（p. 56）と述べている．これはガーンディーからの引用ではなく，著者の地の文であるが，西洋社会を「近代文明」という「大病」に侵されていると糾弾していたガーンディー（p. 18）が，このような言い回しを使ったとしても不思議ではないかもしれない．しかし，少し客観的にみると，この表現には問題がある．なぜなら，近代の西洋においても，自らの政治的行動に，超越的かつ内在的な宗教的意味を見出すことが「ありえない」などということはありえないからだ．

このことは，本書を読みながら評者が感じた第 2 の小さな違和感とも，ほんの少し関係がある．それは本書の冒頭部分で，著者が，ガーンディーのブラフマチャリヤが「これまでほとんど学術的研究の対象となることがなかった」と書いていることだ．1990 年代半ばにアメリカの大学院で，ガーンディーのセクシャリティについての議論をときおり耳にしていた評者は，この一節を読んだとき，「ほんまかな？」と思ったのである．しかし，ほんの少し読みすすめると，ガーンディーの政治思想の形成過程や意味をブラフマチャリヤの実験との関係から「詳細に分析したものは皆無であった」というセンテンスに出会う．さらに読みすすめると，ガーンディーのブラフマチャリヤを主題にした学術的論考は複数存在するが，ガーンディーのナショナリズム思想とブラフマチャリヤ実験に関わる一次史料を徹底的に渉猟し，緻密に内在的に分析した研究は，本書より前には存在しなかったということがわかる．そして，これは正しい．「いくつかの先行研究」と題された序章第 2 節でとりあげられているジョセフ・オルターは，ガーンディーの身体とナショナリズムについての著書［Alter 2000］を公刊するずっと以前から，インドのレスラーについての人類学的調査を行なっていた［cf. Alter 1992］．そこでのテーマは，身体の鍛錬という目的によって自らの生活全般を律しているレスラーたちが，同時に社会改革者でもあり，自身と社会全体を相似的で，ともに身体的構造をもつものとしてとらえている，ということである．そのレスラーたちにとっても，精液の保持と蓄積は重要な課題であった．ここから考えると，オルターにとって，ガーンディーは，インドの身体や道徳性について人類学的に考えるための，さらなる応用問題であったようにもみえる．ガーンディー自身の人生と思想を深く理解したいと望む人には，私は迷わず間氏の著書を薦めるだろう．しかし，本書が同時に明らかにしているのは，ガーンディーの人生と思想が，独立運動期のインドという時代的・地理的制約をはるかに越えて，現代の世界にとっても大きな意味をもっているということだ．ガー

ンディーと直接的な思想的影響関係にない人物や事象について考える際にも，それが身体性に関わることでも，倫理，社会，政治，経済，環境，セクシャリティ，宗教，世俗性その他に関わることであっても，ガーンディーの人生は，深く独特な視点を私たちに与えてくれる．そのように，ガーンディーを通して，自己と世界についてなんらかの新しい視座を得ようとするときに，本書は大きな助けになると考える．

引　用　文　献

Alter, Joseph S. 1992. *The Wrestler's Body: Identity and Ideology in North India*. Berkeley: University of California Press.

———. 2000. *Gandhi's Body: Sex, Diet, and the Politics of Nationalism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Lal, Vinay. 2000. Nakedness, Nonviolence, and Brahmacharya: Gandhi's Experiments in Celibate Sexuality. *Journal of the History of Sexuality* 9(1/2): 105–136.